

大災害の発生は「終わり」ではなく「始まり」である

私がまだ駆け出しの研究者だった頃、ある高名な防災研究者がこう教えてくれました。「東京の人間は、大地震を『終わり』と捉えるが、神戸の人間は『始まり』と捉える傾向がある」

阪神・淡路大震災の発生から10年にも満たない神戸で当時研究をしていた私にとって、その言葉は強く印象に残っています。

東京に限らず、まもなく大地震が来るといわれている地域では、いかにその被害を減らすかという意識が強く、大地震の発生はそのための取り組みの最終期限と捉えられています。ですが、巨大災害はいつ発生するかわかりません。もちろん、私たちは被害軽減に全力を尽くすべきですが、たかだか数年から数十年の努力で被害をゼロにできるほど、自然は甘くはありません。より大切なのは、いかに巨大な災害が発生しても、日本やこの社会をそれで終わらせるわけにはいかないということです。甚大な被害が出たとしても再びよみがえり、災害前よりも豊かな社会を築くこと、そして次の巨大災害に再び備えていくことは、災害列島日本に暮らす私たちの宿命でもあります。すなわち、大災害の発生は、そうした社会の再生の過程の「始まり」としても捉えられなければならないのです。災害過程研究部門は、災害をまさにこうした破壊から再生へと向かう

を見つめ、応援と受援の経験を記録し、復興へ向かう地域の力を捉え、次の備えへ手がかりを残す



背景図は、能登半島地震における災害過程研究部門の取り組みを象徴的に構成したイメージです。
丸窓内の写真は、各記事の主題に関連する活動の様子を示しています。



社会防災研究領域
災害過程研究部門 研究部門長
永松 伸吾

社会の物語と捉え、そのメカニズムを明らかにすることを主たる研究目的としています。

今回、この特集で私たちがお伝えしたいのは、2024年1月に発生した能登半島地震を受けて、私たちがどのような活動を行い、そしてそこからどのような科学的な知見が得られたかについてです。能登半島地震は、高齢化・過疎化が進み、かつアクセスが制限されがちな半島部で発生した地震災害として特徴づけられます。それはすなわち、今後わが国で発生が想定される南海トラフ巨大地震や、日本海溝・千島海溝周辺の巨大地震などの被害やその復興過程を占うという点においても、極めて重要な意味を持っている災害であるといえるでしょう。このため、私たちはこの地震災害について、早くから現場に入り、その後も継続的に訪問しながら研究を続けてきました。それと同時に、研究成果をフィードバックしながら、現地の災害対応や復興を支援するための取り組みも進めています。

本特集ではそれらのうちの主なものとして、災害発生直後の被災市町村の災害対応に関する研究と、被災者の中長期的な復興状況に関する研究などを紹介します。いずれも、今後の巨大災害から復興や再生を促進するための重要な知見が得られつつあります。被災からの再生をめざす私たちの取り組みについてご理解いただければ幸甚です。